オスマン朝における活版印刷の導入
イブラヒム・ミュテフェッリカの印刷所開設(1727)を中心として

髙松洋一

オスマン朝における、ムスリムによる最初の活版印刷は、1727年イスタンブルにイブラヒム・ミュテフェッリカが開設した印刷所によって行われた。15世紀半ばにグーテンベルクが活版印刷術を発明してから、実に300年近くの歳月を要したことになる。文化史上画期的な意義をもつ事件として、イブラヒム・ミュテフェッリカの印刷所は、従来出版史、書誌学、思想史、文化交渉史など、さまざまな観点から研究されてきた。しかし依然として、ドイツのオスマン史家バービンガーが1919年に公刊した業績が、この印刷所に関する標準的な研究となっていることは、同書が最近トルコ語に初めて訳されたことからも理解される。

実はイブラヒム・ミュテフェッリカの印刷所以前に、オスマン朝において活版印刷が知られていなかったというわけではない。しかし1485年にはすでに、オスマン朝においてムスリムがアラビア文字によって印刷を行なうことは、勅令により禁じられていたのである。

ムスリムに対するアラビア文字印刷の禁令の理由として、クルアーンの言葉を書き記した神聖なアラビア文字を、ムスリムが西欧キリスト教世界起源の技術によって複製することに対し、保守的なウラマーが反感を抱いたこと、経済的な損失をこうむる写字生が反発したことがしばしば指摘される。またアラビア文字による印刷は、15世紀末から西欧においてすでに試みられており、クルアーンをはじめ、宗教書、文法書、辞典などが印刷されていたが、これらのアラビア文字出版物で用いられた活字が、アラビア文字書道の美的観点からは鑑賞に堪えない質の悪いものであったことも、活版印刷術の導入の妨げになったと言われている。

しかしながらオスマン朝の当局はアラビア文字の印刷物の存在自体を否定していたわけではなく、例えば1588年にはムラト3世がエウクレイデースの『幾何学原論』のアラビア語訳刊本の輸入を許可している。またアラビア文字の印刷の禁令は、ムスリムのみを対象にしていたのであるが、非ムスリムによる印刷もオスマン朝領

内で始まったのはかなり遅く、17 世紀末から 18 世紀初めにアラブ系のキリスト教正教会の聖職者によってワラキアやアレッポの印刷所において、アラビア語の出版活動が行なわれたのが最初である。またヘブライ文字、アルメニア文字、ギリシア文字による印刷はイスタンブルの非ムスリムの手によって早くから行われていた。こうした出版物の中には、アラビア文字を用いたわけではないが、トルコ語やペルシア語のテキストも含まれていた。

オスマン朝のムスリムに対し、活版印刷の利点を説き、その導入と普及に努めた人物は、トランシルヴァニア生まれのハンガリー系改宗者イブラヒム・ミュテフェッリカ (?-1746) であった。プロテスタントの神学生であった彼が改宗し、常備騎兵軍に入ってオスマン朝に仕えるようになった経緯はいまだ詳らかでないが、1716 年近衛騎兵（ミュテフェッリカ）になったことで現在の呼び名で知られるようになった。後に彼は自らの出自を生かしてオスマン朝の外交使節としても活躍した。またトルコ語、アラビア語、ペルシア語、ハンガリー語のほかにラテン語にも通じ、西欧の文化人と文通も行っていたようである。このネットワークがのちに出版物を西欧に紹介する際に役立ったと言われている。

彼が最初に行った出版は、木版印刷による地図の刊行であった。活版印刷所の開設に先立ち、1719/20 年にはマルマラ海、1724/25 年には黒海の地図を出版している。当時のアフメト 3 世治下のイスタンブルは、対外的に宥和政策をとった大宰相ネヴシェヒルリ・イブラヒム・パシャのもと、チューリップ時代と今日通称される文化の爛熟期を迎え、西欧の文物が流行していた。こうした時代の雰囲気が、木版印刷による出版活動に手を染めていたイブラヒム・ミュテフェッリカが活版印刷所開設の許可を得るのに役立ったことは想像に難くない。

1727 年に彼は、最初のパリ大使イルミセキズ・チェレビの息子で自身もフランス滞在経験のあるサイト・メフメト・エフェンディと連名で、印刷所の開設を大宰相に申請し、許可を受けてイスタンブルの自宅を印刷所とした。

イブラヒム・ミュテフェッリカが政府に提出した嘆願書から、彼が印刷所開設にあたり慎重な根回しを行ったことが理解される。印刷が適法であることを示すファトワーと勅令の公布を求め、これらのテキストは最初の刊行物であるアラビア語・トルコ語辞典の巻頭に掲載された。勅令は、法学、クルアーン解釈学、ハディース、神学を除き、辞典、歴史、医学、物理、天文学、地理学に関する出版を許可するこ

と、印刷術が安価な書籍を流通させることがムスリムの福祉に役立つことを述べている。

こうしてイブラヒム・ミュテフェッリカは 1729 年から 1742 年にかけて辞典、歴史書、地理書を中心に 17 点の書物を刊行したが、その中にフランス語によるトルコ語文法書や、彼自身の手になるオスマン朝の改革に関する論考および方位磁針の解説書が含まれていることが注目される。実際の出版活動は 1729 年から 30 年 (8 点)、1732 年から 34 年 (5 点)、1741 年から 42 年 (4 点) の 3 期に集中して行われた。最初の中断は 1730 年から 31 年にかけてアフメト 3 世の退位と大宰相ネヴシェヒルリ・イブラヒム・パシャの処刑を引き起こしたパトロナ・ハリルの反乱によるもの、次の中断は彼自身の公務の繁忙によるものと思われる。

1743 年にダゲスタンへの使節となったのち、46 年にイブラヒム・ミュテフェッリカが没すると、印刷所の活動は停滞した。彼の相続人が 1755 年にアラビア・トルコ語辞典を再刊した後、活動は完全に停止し、印刷機材も散逸の危機に瀕してフランス大使館に払い下げられそうになった。1784 年から 87 年にかけて一時再興された印刷所はさらに歴史書、アラビア語文法書、フランス語の軍事技術書からの翻訳書を計 6 点刊行したが、結局これを最後として印刷機材は 1797 年に新設された工学校印刷所に譲られ、その使命を終えたのだった。

こうしてイブラヒム・ミュテフェッリカの印刷所の活動は終息したが、19 世紀に入り開設されたウスキュダル印刷所では文学書、宗教書も印刷されるようになり、1830 年代には、新しく発明された石版印刷も導入され、印刷技術はオスマン朝において完全に定着したのであった。

オスマン朝における活版印刷の導入は、通説のごとく西欧に範をとった改革の端緒として位置づけられるが、これはハンガリー人改宗者イブラヒム・ミュテフェッリカという人物を得て初めて可能であったと言える。今後は彼の出版活動に関して、オスマン朝や西欧諸国のアーカイブズに眠っている関連史料の発掘が期待される。